

# 大阪大学図書館報

Vol. 20, No. 5 &amp; 6, Mar. 1987 (昭62) 通巻87号

## 目 次

- |                                       |           |
|---------------------------------------|-----------|
| ○図書館長退任の弁                             | ○教官著作寄贈図書 |
| ○学術情報センター昭和61年度第1回総合目録データベース実務研修に参加して | ○会 議      |
| ○昭和62年度BIOSIS利用者モニターの募集について           | ○日 程      |
|                                       | ○お知らせ     |

## 図書館長退任の弁

後 藤 稠

図書館長を退任するにあたって、改めて大学図書館というものについて考えてみようと思う。

一昨年のものであるが、館長就任そうそうに文部省主催大学図書館職員講習会が大阪大学で開かれた。当番大学の館長が2時間の皮切り講演をする習わしになっている。勿論、私の専門の職業病の話をするわけにはいかない。私は図書館の歴史、現状、等々について1カ月ばかり勉強した。図書館というものについて考えるのに必要な基礎的素養を身に着けることができたという点で、私はこの講演の機会が与えられたことを感謝している。

一個人の蔵書あるいは図書館を中心にして、大学が発展してきたことは周知の通りである。ソルボンヌ大学がその代表例であろうが、その凡そ半世紀前、わが国に既に金沢文庫が誕生していたことを上述の勉強で知って、私は大変嬉しかった。金沢文庫は、鎌倉中期北条実時が金沢(横浜)の称名寺境内に基礎を築いた図書館で、足利学校と並んで、わが国中世教育史上重要な存在である。その図書館としての規模もソルボンヌを凌駕するものであったし、またサービス範囲も北条一族に限らず全国に及んでいたとのことである。

わが国大学図書館のルーツ、その後の発展過程などを西欧のそれと比較して遜色をみない。江戸期幕閣の文治主義による紅葉山文庫、昌平坂学問所文庫などや塙保己一の和学講談所の活動もさることながら、木村孔恭の蒹葭堂など多くの民間文庫、さらには貸本屋、寺小屋による庶民の教育レベルの高さは、欧米以上のものであったと考えられる。

問題は、西欧文化が生んだ学問・技術が、近世にはいつて軍事的・経済的に世界を急速に

支配しはじめたことであろう。江戸末期以降、わが国が挙げてこの異質文化の吸収摂取に努めることになるが、ここに、わが国の文化の流れに一つの大きい不連続が生じてしまう。

何年前か、西独のジャーナリストが「一億人のアウトサイダー」というベストセラーを書いた。著者はドイツ的生真面さで、日本文化を理解しようと痛々しい程努力している。彼はこう結んでいる——西欧に一般である教育は片寄っている。西欧文化を中心にした価値系が唯一無二のものと教えるのは間違いだ。世界には複数の価値系があって、それぞれが固有の歴史と文化と有用性をもっている。

歴史をあともどりさせることはできない。われわれは日本文化と西欧文化との均勢のとれた融合を志向しなければならないと思う。そのためには、新しい価値系、新たな思想を創りださなければならないであろう。この価値系、思想を追求することが大学における研究テーマでなければならないと私は考えている。このことに関連して、私はフィジカルな問題を中心にした文化は今世紀を頂点として影を潜め、来る21世紀からメタフィジカルな世界に重きをおく文化が、再び頭を擡げてくるように思えてならない。

大阪大学はそのルーツとして文科系に懐徳堂、理科系に適塾をもっている。この2つの大阪が生んだ誇るべき文化の流れをふり返えることから、小さくは大阪大学の在り方、大きくは日本と世界の文化のこれからのあるべき姿を考えることを始めたいと思う。そして、この研究と思索の場になることが、大阪大学附属図書館の使命であって欲しい。その意味で、次期図書館長に矢守一彦教授が選出されたことを、私は心から慶賀したい。

(ごとうしげる 附属図書館長 医学部教授)

## 学術情報センター昭和61年度

### 第1回総合目録データベース実務研修に参加して

山下 進

昭和61年5月27日から7月21日までの8週間、学術情報センターの標記の研修に参加した。この研修は、昭和61年4月5日、国立大学共同機関であり、学術情報システムの中核機関として東京大学文献情報センターが学術情報センターへ改組拡充されてはじめてのものであり、その点でも大へん意義深いものであった。

内容は、前回昭和60年度に行われた「実務研修」とほぼ同じものであったが、研修参加者の各職場での日常業務の影響を考慮して期間を11週間に8週間に改め、いっそう密度の濃いものにしようということであった。

学術情報センターは利用支援サービスの一環として、目録所在サービスの利用に際し、これを円滑に行うため、オンライン・システムの使用法等に習熟することを目的として「目録システム講習会」(図書目録システムコース)をすでに行っている。しかし期間が3日間であるため、システム利用に必要な知識、技能を十分習得することは時間的に困難と思われるので、それを補うために「実務研修」は8週間という長期にし、各図書館の目録データ入力担当者を育成することを目的としたものである。

参加対象者は、学術情報センターと既に接続している図書館または接続が確定している図書館の職員で、阪大の他、7大学、11名であった。

研修日程は8週間に各々午前、午後各1コマに分け、大きくは①「講義」(10コマ)、②「演

習」(26コマ)、③「目録実習」(36コマ)、④「見学」(2コマ)と4つになり、各週の最初の午前中をその前の週で行った研修のまとめと次の予定を考えるというものであった。

各々の内容については、「講義」は①情報管理論と学術情報センター・システム、②目録所在情報システムと今後の大学図書館、③我が国の目録規則の動向と学術情報センター目録システム、④学術情報センター目録システムの設計思想と展開、⑤文献情報とニューテクノロジー、⑥雑誌データベース形成、⑦通信ネットワークと学術情報システムの展開、⑧目録所在情報サービスの運用、⑨学術情報センターシステムにおける教育、訓練、⑩学術情報センター業務の概要。「演習」は①グループ課題として目録システム講習方法の設計・演習で各図書館の目録講習会を開く際に必要なテキスト等の作成、②個別課題として、各研修員所属図書館固有の問題の検討。「目録実習」は①目録システム操作、②MARCの変換仕様の把握、③オリジナル入力の実習、④学術情報センター所蔵資料について業務モードでの入力、⑤典拠ファイルの作成。「見学」は①東大附属図書館、②慶応大図書館、と以上のような大へん盛り沢山なものであった。

今回の研修は、いわゆる講義を一方的に受けるというやり方ではなく、我々11名の研修員のためにデータベース研修室が与えられ、各課題について自由に自己研修が出来るよう配慮された大へんめぐまれた形になっていた。また研修日程自体もほぼ予定通り行われたが、その時々での研修の進みぐあいに依りて流動的な部分も残されていた。そのようなことで8週間の研修の後半は、「目録実習」にはやはり相当時間を割かなければならず、その結果「演習」のグループ課題であるテキスト作成の時間に食い込み、研修期間の終盤にはテキスト作成はかなりハードなものにならざるを得なかった。

その中で特に「目録実習」でのMARC変換のしくみを把握出来たことは、参照ファイルがどのように作られているか、その結果流用入力画面をどのように利用したらよいかを多くの問題点を含めて学んだこと、従来のカードフォームのイメージだけではなかなか捉えにくい「書誌構造」とその画面間の関連について学ぶことが出来たことは大へん有益であった。このようなことは研修参加前にいくら資料を読んでもなかなか理解しにくいことであったが、実際に学術情報センターで研修を受けてはじめて理解出来たことであった。

また研修期間中を通じて、各自が研修したことについて毎日研修員全員でその日の疑問点、問題点を出し合って意見交換を行い、それらを共通のものにしていった。時には遅くまで活発な討議がなされたが、そのような作業をくりかえし行ったことは学術情報センターシステムを理解する上で大へんプラスになった。

「目録システム」の特長は、大まかに言って①所蔵まで含めた総合目録データベースと②典拠コントロールがなされているということです。②の典拠コントロールでのリンク作成は、従来のマニュアル作業から見ればかなりの負担になるだろうがレコード間のリンク作成を行うことにより重複データを避け、質のよいデータベースを構築していく上ではやはり不可欠なものではないだろうか。

オリジナル入力時のデータのコピー機能(例えば書誌画面の“標題及び責任表示”の著者等の著者名リンクフィールドへのコピー等)を可能にしていくことは今後、作業量を軽減していく上で重要である。また質のよいデータベース構築には、オリジナル入力は当然として参照ファイルとNC書誌ファイルの目録記述の相違により、“目録対象資料”とヒットしたからといって修正しないでそのまま機械的に参照ファイルを流用出来ない点等、最終的にはやはり目録規則の問題に帰するのではないかと言うのが端末操作を実習した後の卒直な感想である。

学術情報センターでは、データベース研修員だけでなく、タスクフォース、セミナー研修員の方と親しく情報交換が出来、センター職員の方に直接指導を受けることが出来たこと、それによって人のネットワークが得られたことが何と云っても最大の収穫であった。

最後に多忙なところ時間をさいて指導をして下さった諸先生、研修期間中種々な援助をして下さったセンター職員の方々に感謝したい。また2カ月間の長期にわたり研修を受けるためにご配慮下さった上司、スタッフの方にお礼を申し上げたい。そして研修で学んだ成果を少しでもこれからはじまる目録業務の機械化に生かせるよう努力していきたいと思っている。

(やましたすすむ 和漢書目録掛長)

## 昭和62年度BIOSIS利用者モニターの募集について

昭和62年度のBIOSIS利用者モニターを、下記の要領で募集しています。BIOSIS 利用者モニターとして、ご協力いただける方は、ぜひ、ご応募くださるようお願いいたします。

### 記

- 資 格：本センターの利用有資格者  
 期 間：昭和62年4月～昭和63年3月  
 内 容：(1) 検索コマンドの使い易さに関する事項  
           (2) 検索キーワードの切り出し方  
           (3) その他、利用にかかる諸問題  
               について、定期的な会合等でご意見を出していただきます。  
 待 遇：計算機利用経費の負担額の一定額免除  
 応募方法：応募用紙が、大阪大学大型計算機センターにありますので、必要事項を記入のうえ、下記宛まで提出してください。  
           〒567 茨木市美穂ヶ丘5番1号(阪大吹田団地内)  
           大阪大学大型計算機センター共同利用掛(内)2817  
 締 切 日：昭和62年3月20日(金)  
           応募用紙の請求および不明な点については、大阪大学大型計算機センター  
           共同利用掛 TEL 06-877-5111) までお問い合わせください。

## 教官著作寄贈図書

一本 館一

故梶原三郎(医・名誉教授)

(寄贈者：後藤 稠)

梶原三郎エッセイ集

(後藤 稠 昭61)

田村 博(基・助教授)

利用者インタフェース・ソフトウェア設計ガイドライン

(インタフェース・ソフトウェア研  
 究会[大阪大学基礎工学部内]昭61)

原書名：Design guidelines for user-system interface software.

木村重信（文・教授）  
巨石人(モアイ)像を追って  
(NHK 昭61)

宮地 裕（文・教授）  
論集 日本語研究 1・2  
(明治書院 昭61)

—基礎工学部図書室—

田村 博（基・助教授）  
利用者インタフェース・ソフトウェア  
設計ガイドライン  
(インタフェース・ソフトウェア研究  
会〔大阪大学基礎工学部内〕 昭61)  
原書名：Design guidelines for user-system interface software.

—中之島分館—

田口鐵男（微研・教授）  
癌化学療法の基本と臨床  
(癌と化学療法社 昭61)  
吉矢生人（医・教授）  
集中治療の手びき  
(南山堂 昭61)

—吹田分館—

竹本 正（溶接研・助手）  
ソルダリング・イン・エレクトロニクス  
(日刊工業新聞社 昭61)

岡田光正（工・教授）  
火災安全学入門  
(学芸出版社 昭60)

田村坦之（工・助教授）  
大規模システム—モデリング・制御・意  
志決定  
(昭晃堂 昭61)

上田 篤（工・教授）  
建築からの仕掛け  
リ・インカネーション展 1980~1985  
(学芸出版社 昭61)

上田 篤（工・教授）  
流民の都市とすまい (駸々堂 昭60)

榎木 亨（工・教授）  
漂砂と海岸浸食  
(森北出版 昭61)

田村 博（基・助教授）  
利用者インタフェース・ソフトウェア  
設計ガイドライン  
(インタフェース研究会〔大阪大学基  
礎工学部内〕 昭61)  
原書名：Design guidelines for user-system interface software.

■■■■■■■■■■ 会 議 ■■■■■■■■■■

——薬学部分館運営委員会——

61. 11. 20(木) 11:00~11:30 (薬学部会議室)

協議事項 1. 次期薬学部分館長の選出について

現分館長、岩田宙造教授の任期満了に伴ない、薬学部分館長候補者選考規程に基づき、選考の結果、岩田宙造教授が再選され、次期分館長に決定した。

——豊中地区運営委員会——

61. 11. 28(木) 15:00~17:00 (本館・会議室)

協議事項：附属図書館体系検討小委員会について、1. 林委員長から、附属図書館体系検討小委員会（以下「小委員会」という。）の性格、経緯および同委員会を再開するに至った経緯等について、資料に基づき説明があった。2. 小委員会委員2名の選出について、1の説明の中で、図書館の大幅な改革案が提示されたが、図書館のあり方にかかわること、小委員

会は、図書館委員会の下部組織であること、小委員会の性格、委員数等、要綱の再検討も行う必要があること、等の理由から、まず図書館委員会を開催して、これらの点についての取り扱いを決定すべきであるとの意見が大勢を占めた。従って、今回の委員選出は行わず、小委員会の要綱等について再検討すべきであることを館長に回答する旨提案がありました承された。

——分館長会議——

61. 12. 16(火) 15:00~17:00 (本館館長室)

報告事項 1. 主要行事について。

協議事項 1. 次期附属図書館長候補者の選考について。次期附属図書館長の候補者選考要領案および候補者一覧等の資料に基づき、事務部長から説明があり協議された。その結果昭和62年1月9日に開催予定の図書館委員会において、次期図書館長を選考することが了承された。2. 附属図書館体系検討小委員会について。大阪大学附属図書館体系検討小委員会(以下「小委員会」という。)は、大阪大学図書館委員会の下部組織であるが、附属図書館の将来計画等全般にわたって審議するという性格を重視して、この小委員会が、改めて検討されることとなった。とくに、組織や、委員の構成等について見なおす必要があるとの意見が出された。種々、協議の結果、小委員会の組織・構成等の要綱についての改正案を作成し、図書館委員会に諮ることが了承された。

——図書館委員会——

62. 1. 9(金) 15:00~17:00 (本館・会議室)

報告事項 1. 主要行事について：事務部長から、各種行事および委員会の活動状況について報告があった。2. 大型コレクションについて、昭和61年度は、Partial library of the Savigny family (サヴィニー家旧蔵コレクション) 1セット318点を購入することとなった。3. 吹田分館の増築について：61年12月17日に2400㎡の建物が竣工した旨、報告があった。

協議事項 1. 次期附属図書館長候補者の選考について。部局から推薦された候補者一覧の中から、「大阪大学附属図書館長選考基準」により、館長候補者1名を選定するための選挙が行われた。その結果、文学部教授の矢守一彦氏が選ばれ、選考基準第5条により、同氏を次期図書館長候補者として総長に推薦することとなった。2. 附属図書館体系検討小委員会について。「大阪大学附属図書館体系検討小委員会要綱」のうち、「要綱」を「内規」に改めるほか、ほとんど各条文について改正案が出され審議された。とくに第三条の小委員会の組織について質疑応答があり、種々協議の結果、原案のとおり承認された。

■■■■■■■■■■日 程■■■■■■■■■■

61. 11. 12 国立大学図書館協議会常務理事会 (昭和61年度第1回) (東北大学)  
 ♪ 昭和62年度国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会 (第1回) (東北大学)  
 ♪ 日本医学図書館協会将来計画委員会 (順天堂大学)
61. 11. 13 国立大学図書館協議会理事会 (昭和61年度第2回) (東北大学)
61. 11. 20 薬学部分館運営委員会 (薬学部会議室)
61. 11. 25 学術センター・ネットワーク打合せ会議 (学術情報センター)

61. 11. 27 近畿地区医学図書館協議会例会 (第39回) (兵庫医科大学)  
 61. 11. 28 豊中地区運営委員会 (本館)  
 61. 11. 28 吹田分館図書選定小委員会 (吹田分館)  
 61. 12. 1 大型計算機センター・データベース管理者会議 (大型計算機センター)  
 61. 12. 8 国公立大学図書館協力委員会文献複写委員会 (第39回) (好文倶楽部会議室)  
 61. 12. 9 総合情報通信システム検討推進委員会専門委員会 (事務局)  
 61. 12. 16 分館長会議 (本館)  
 61. 12. 18 図書館間相互貸借の推進方策調査研究班 (本館)  
 61. 12. 19 全学事務長会 (事務局)

~~~~~  
**お知らせ!** 本館：参考掛・閲覧第一掛  
 ~~~~~

☆ 夜間開館の休止

休止期間：昭和62年3月2日(月)～4月の授業開始前日まで。

なお、この期間中、開館時間は次のとおりです。

月～金：9：00～17：00
土：9：00～12：30

分館、分室については、それぞれのカ  
ウンターでおたずねください。

★ 照会事項の連絡先：

次のことがらについての、お問い合わせは、とくに紛らわしいので、下記にご留意くだ  
さい。

問い合わせの内容	担当する掛	電話(内線)
○本や雑誌が、あるか、ないかを知りたいとき	参考掛(2階)	2356(2355)
○本や雑誌が、どこにあるかを知りたいとき	〃	〃 〃
○他大学へ、複写(コピー)や、貸出しを申込みた いとき	〃	〃 〃
○学内で複写(コピー)をしたいとき	閲覧第一掛(1階)	2368(2367)
○他大学から本館へ複写を申込みたいとき	〃	〃 〃
○本館を利用したいとき	〃	2366